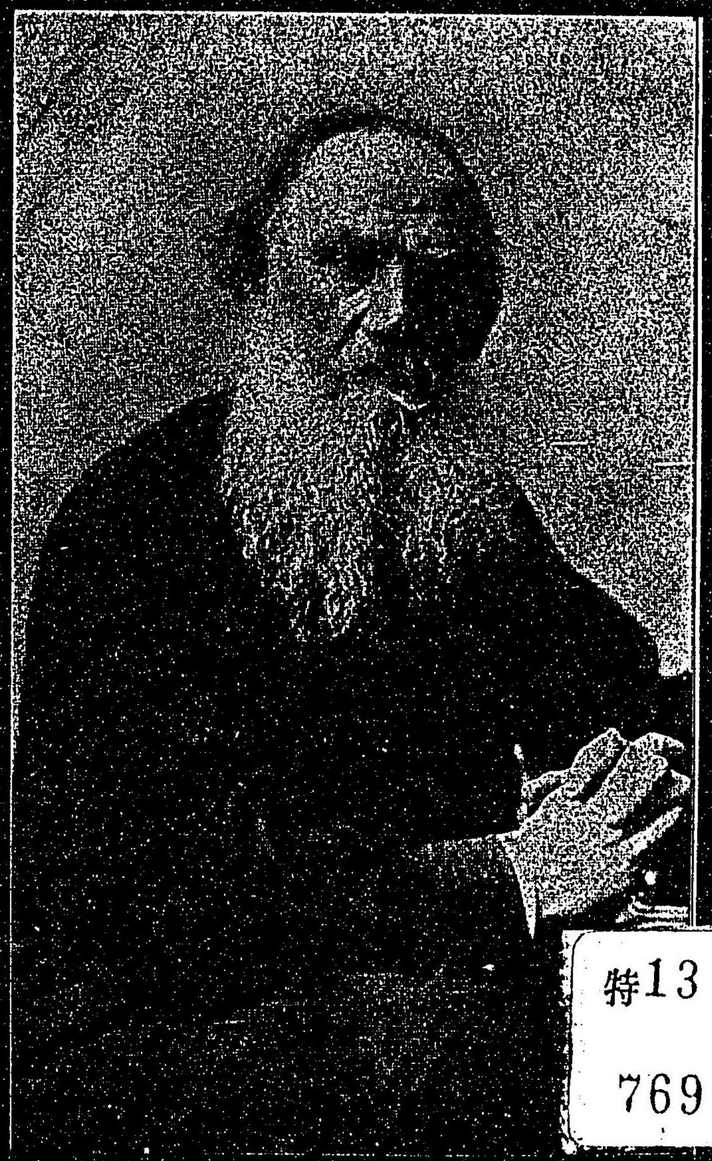
通俗文庫第五編

二人巡禮



特13
769

百島冷泉譯述

通俗文庫
第五編

人巡禮

東京
內外出版協會

防治
47 3 11
內交

百島冷泉譯述

通俗文庫
第五編

一人巡禮

東京
內外出版協會

防治
41 3 11
內交

序

本書收むるものはトルストイ翁が短篇小説二篇である。彼は今もヤスヤナ、ポリヤナの片田舎に在つて、世道人心の歸趨を世界人類に敎へんと盡瘁して居る。——

我等謙遜つて彼の聲に耳傾けしめよ。

彼の聲は我等の靈魂に如何にか響く。

拙い譯筆ではあるが、彼の聲をこの叢書中に收め得たのを自分は感謝する者である。

明治四十一年二月

百島冷泉

この叢書が何な方々に讀まれて、何な影響を及ぼして居るかは譯者の切に聽きたい所である。願はくばこの叢書を讀まれた父上、母上、兄弟姉妹、ならびに子供方から、その感じや、その思ひや、これを讀むだ爲めの出來事や、また譯者に對する希望などを、東京府豐多摩郡西大久保村五〇四百島操宛にて御通信下さるならば、譯者の喜びは此上ないのである。

二人巡禮

目次

二人巡禮……一
神の敎子……四七
（附錄）
トルストイ伯の家庭……九一
以上

特13
769

二人巡禮

婦いひけるは主よ我なんぢを預言者と知り、我儕の列祖は此山にて拜しゝに爾曹は拜すべき所はエルサレムなりと曰ふ、イエス曰ひけるは婦よ我を信せよ、唯に此山のみに非ず亦エルサレム而已にも非ずして爾曹父を拜すべき所きたらん、爾曹の拜する者を爾曹は知らず、我儕の拜する者を我儕は知る、そは救はユダヤ人より出づるが故なり、眞の拜する者靈と眞を以て父を拜する時きたらん、今その時になれり夫父は是くの如く拜する者を要め給ふ……（約翰傳四章）

二人の老人が、エルサレムへ巡禮に出懸ける事を約束した一人は富者のエフイムと言ひ、一人は富者とは云へない、まあ普通の暮をしてるエリザといふ老人であつた。

一體エフイムはその村きつての端嚴家で、酒は飲まず、煙草は吸はず、諧謔一つ言つた事のないやうな人間である。だから選まれて二度までも村長の役を勤めた。その家族といへば二人の子息と、その一方には孫まで出來て居る大家族だけれど、仲善く一緒に住むでゐた。年齢は早七十近くにもなるが、見るから頑丈さうな、白髪も漸とこの頃少しづゝ生えて來た位のものだ。

また一方のエリザは昔は大工職であつたのだが、今では可なりに暮して居る。子息の一人は出稼に行つてるが、他のは親と一緒に住むでゐる。老人さんなか〳〵の深切者で、氣は至つて快活いだ、煙草は勿論酒も飲む、一番欲ぎなのが歌で、鼻歌でも歌ひながら、呑氣に暮して居ると云ふ人だ……奴さん丈は至つて低く、髪毛もまた眞黒で、一目見た處では、哲學者じみて居るが、その實蜂蜜など飼つて樂しむで居るのだ……こんな風だから、誰にでも可愛がられて居た。

この兩老人が、以前からエルサレムへ巡禮に出懸ける事を約束してゐたが、何うも何方かに常も都合が悪くつて、今日まで延び〳〵になつて居たのである。孫の結婚で差支へた事もあれば、子息が軍隊から歸つて來たり、また家の普請などで……けれど或る祭日に兩人がある處で落合つて、談話の序に、

『何うでせう時に、例の約束を此度こそは果さうではありませんか』

とまづエリザが口を切つた。するとエフイムは、

『けれど、ま少し待つて貰ひたいものだ……家の普請で非常な物入をやらかして、大に弱つてる所だもの……夏にしては何うだらう……その方が神樣の御思召にかなひさうだが……』

『なに神様の御思召！そんなら今の方が可いですさ、旅は春に限りますから』

『それは然うかも知れないが、今いふ通り丁度家の普請中だから』

『貴方が居らつしやらないでも普請の事なら可いでせう、子息も居らつしやるから』

『處が矢張私が居ないと埒が開かないでね』

『そんな事はありますまい……もし貴方の仰しやる筆法ですと、この村の事だつて私達が死むでも了へば、成行かないと云ふ事になりますが……そんな事もありますまい』

『それは然うだが……其處がまた然う行かない所なのさ』

『そんな事を言つて居たら局がない』

『それでも普請で大物入をしたので……旅費にも困らうと思ふからさ……』

エリザは笑つた。

『そんな馬鹿な事を仰しやつて堪るもんですか……まあ貴方の身代を私のと較べて御覽じろ、十倍もあるでせうに……けれどそれでもと仰しやるなら、私が何程かは融通を致しても宜うムいますが……』

斯う言はれてエフィムも亦微笑つた。

『お前様がそんな金滿家とは思はなかつた……では何程融通して貰へようかしら』

『左様ですね、まあ家にある有金を悉皆集めて見ませう……それに飼つてある蜂巣を欲しがつてる人がありますから、半分位は讓ることにすれば……』

『巣を破しちや困るぢやないか』

『困る！なに困るものですか、罪を犯す外には何も困る事はありません……何と言つても魂が一番ですから』

『それは然うだ。併しそれも困つたものだよ』

『けれど魂が惡くなれば、尙のこと困つた事ではありませんか……さあ無駄口など中止めまして、何うでせう、約束通り行く事に爲ようではありませんか……さう何時までも放棄つとく理にも行きますまいから』

（三）

終にエリザはエフイムを說伏けた。エフイムは熟考へとく事にして別れたが、翌日エフイムはエリザを訪ねて來て、

『では出懸ける事に爲よう……眞實にお前の言ふ通りだ、死ぬるも生きるも何日か判明らない、だから神樣が生して置いて下さり、まだ〳〵力のある中に早く詣で〵置くのが一番だ』

エフイムは所有金の百ルーブルスを自分の路用にあて、二百ルーブルスを老妻へ殘した。エリザの方では蜂の巣を五つ人に分けてやり、不足の三十ルーブルスを家中から集めた。その外老妻は自分の葬式にと貯めて置いた金を所夫に贈るし、嫁も亦自分の金の何程かを贈つた。

エフイムは家事上の事は、悉皆子息に篤と言ひ殘した。貸してある牧場の地面がこれ〳〵、耕してある地面がこれ〳〵、その中出來上つてるのがこれ〳〵、その他家根の事までよく話して行つた。けれどエリザは唯蜂巢の新しく賣る奴を、分けてやる事を話したぎりで、その他の事は何も話さなかつた。

『爲なければならない事は、どし〳〵自分で爲るが可い、今ではお前が主人役だ……思ひ通りにやるが可いさ』

女達が何や彼やと世話して呉れたので、旅の支度は直ぐ出來上つた。そこで兩老人は家族に送られて家を出で、村外まで來ると一同と別れ

て、いよ〳〵兩人連の旅となつた。

エリザは氣輕だけに、村に殘して來た思ひなどは直ぐ忘れて了ひ、何うして仲間を樂しませてやらう、何うして無駄口を辯くまい、何うして旅を終へて、家に歸つて一同と樂しまう、そんな事を考へてるのであつた。だから途中〳〵御題目を稱へたり、記憶してる聖者の事を考へたりして歩行いてゐた。また時とすると、出遭つた人には深切な言葉を懸け、深切な行爲を爲なくてはならぬ等思うて居たから、旅がなか〳〵愉快で堪らなかつた。けれどその中にも一つ忘れる事の出來ないのは、鼻煙草の欲しい事と、その袋物を忘れて來た事だ。併しての鼻煙草も途中で遭ふ人が呉れるものだから、程なくそんな苦勞も爲なくなつた。是に引更へて、エフイムは歩行くのは達者で、餘り言葉も出さないが、さて心には滿足といふものがなく、家事上の事が氣になつてならなかつた。……はて例の仕事は何うなつたらう、俺の言付けを忘れはしまいか、命令通りよくやつて居るかしらんと思ふのであつた。殊に途中で、芋の生えてるのを見たり、肥料の運搬ばれるのを見たりする度ごとに、

『子息達は俺の命令を確と爲て居るだらうか』

と考へ、時とすると子息の働いてる仕事が見たかつたり、また自分でも手を出して實行つて見たかつたりするのであつた。

(三)

それから五週間經つた。その間に兩人共靴を磨減らしたので、買つて新しいのと取更へた。その中に兩人は小露西亞へ到着いた。今迄長い旅の間、兩人は食物は買はずばならず、旅泊屋にも泊らなければならなかつたが、此處小露西亞へ這入ると、何處の家でも、兩人を款待して、無代價で泊めても呉れ〳〵ば、食物も食べさせて呉れるものだから、金錢など何

もいらなくなつた。その上泊つて翌日出懸ける時には、鞄へ麵包や果物を入れて土産まで呉れるのであつた。

それから五百哩も歩行いたが、その間一錢の金錢も不要なかつた。……兩人はまた他の領分内へ這入つたが、此處でも何も金錢など不要ないで濟むだ。

所がその次の村へ這入ると、其處では兩人を泊めて呉れるどころか、何んな金錢を出しても、買ふ麵包がないのだ。これはこの邊が去年の收穫に何も取れず、金持さへ破産する者が多かつたからで、……だから貧民などは乞食になつて、其處を漂浪いてゐる者もある。

兩人はとある家に寢て、熱くならない中にと旅をつゞけた。さう七哩も歩行いたと思ふ頃、ある小川の岸へ出た。そこで兩人はその岸へ腰を下して、水を飲み麵包を食べた。

暫らく休むで、エリザは腰から煙草入を取り出した。それを見てエフイムは妙な態度に頭を動かして

『なぜ、お前はそんな惡い習慣を中止めないのだ』

と訊ねた。するとエリザは悲しさうに、

『でも中止めたいのですが、何うも惡い事はなか〳〵中止められないもので……』

兩人は立つてまた歩行きだした。さうまた數哩も行くと、大きな村へと到着いた。その時は晝の眞盛りで、太陽がてか〳〵照りつけるので、何うも熱くつて仕方がない。それでエリザはその邊に一休みして、涸いてる咽喉でも濕したいものだと思うたけれどエフイムはエリザよりか足も健脚であるが、なか〳〵の元氣で、少しも疲勞れた樣子も爲ない。

『私何か飲みたくなりました』

『では何か飲みなさるが可い……私や別に咽喉は渴かない』

エリザは立止まつて、

『では貴方は一足お先きへ行つて下さい、私は此家で一杯水を貰つて、後から追付きませうから』

『ではお先へ』

エフイムは獨で先きへ歩行きだした。エリザはそれで傍の家へ水を貰ひに這入つた。

その家といへば、穢い小さい藁葺き小屋で、壁の上半分は白く、下半分は黑くつて、然も彼方や此方が破れて居て、その上屋根も一方へ傾いて居て、それは〳〵は狹陋しいものであつた。

エリザは家に這入つて行くと、痩せた一人の若い男が、椅子の傍の土地に横臥つてるのを見た。……初めは日蔭だつたのだらうが、今ではその上をてか〳〵太陽が照して居るのだ。それにその男は眠つて居るのか、エリザが這入つて行つても少しも身體を動かしもしない。エリザはその男に聲を懸けて水を貰はうとしたけれど何の返辭もない。

『奴さん病氣か何ぞでないか……それとも寢てる振をしてる厭な奴かな』

と思つて、エリザは尙奥の方へ行くと、奥から子供の泣聲が聞えて來た。

エリザはまた、

『誰か』

と呼むだが、誰も返辭を爲ないから、持つて居る杖で一寸床を叩いて、此度は大聲で、

『もし誰か』

けれど矢張返辭をする者がない。

『誰か居ないんですか』

矢張同じく返辭がないから、エリザは仕方なしに戸口の方へ歸つて行かうとした時、何だか奥の方から呻聲が聞えて來た。エリザは、

『何だらう』

と思ふと、直ぐ、

『見たいな』

といふ好奇心に動かされて、また奥の方へ歩行いて行つた。

四

エリザは聲のする奥の方の戸を開けると、戸は直ぐ開いた。そしてその室の左方に暖爐があり、他方には額が懸つて居る。その直く下に卓子があり、傍に椅子がある。その椅子には一人の老婆が、たゞ下着一枚で、頭を卓子の上に載せて居る。またその傍には一人の子供が、蠟の樣な腹を突き出して、愚圖々々云ひながら食物を強請つて居た。

エリザは室に這入ると、臭い嗅がつんと鼻を衝いたので、厭な氣持になつたが、よく見ると他の女が、籠の彼方の戸棚の傍に足を痙攣かせ、身を悶きながら横臥つてるのが居た。然も打伏せになつて、咽喉を鳴らして居るが、先刻の臭い嗅はその身體からするのだ。……その女は病氣で、誰も看護する者がなく、臥てるのが一目で判明つた。

その時老婆は頭を擧げると、其處に見識らぬエリザが居るので、

『お前樣は何しに來たの』

と小聲で言つて、今度は少し聲荒く、

『何しに來たんだい』

と叫むだ。暫らくしてエリザを乞食とでも思つたのか、

『お前に何も與げる物はないんだよ』

エリザは老婆の方に歩行み寄つて、

『水を一杯飲まして下さいませんか』

『誰も居ないし、今生憎だから去つてお呉れ』

『え、左樣ですか』

『あゝ誰も居ないんだよ、男達は庭で私達は此處で死にかゝつてるんだよ』

子供は見識らぬエリザが這入つて來ると、急に泣きやむだ。そして老婆の袖を引きながら、

『祖母や、お飯をよ』

と言つたが、また泣聲になつて、

『お飯をよ』

その時先刻の庭に居た男が、戸口から這入つて來て、腰掛に上つて、二階へ昇らうとしたけれど何うした調子か、身體をふら〳〵させて床の上へ臥がつた。暫らく悶いて居たが、もう起きようとも爲ないのだ。

暫らく經つて、男は起き上つたがエリザに向つて、

『俺は病氣だ、……此奴等も饑ゑて死にかけて居る』

と呼吸も切れ〳〵に言つて、子供を指示しながらほろ〳〵と涙を流した。

之を見たエリザは肩から鞄を床に下し、麵包を取り出してそれを細かく切り、一同に與らうとした。するとその男は頭を振つて子供を指示し、

『何卒、奴に』

と言つた。それでエリザはまづ麵包を子供に與へると、子供は兩手でそれを握つて頻りと食べはじめた。

その時小娘の一人が籠の方から來かゝり、子供の食べてる麵包を羨ましさうに熟視めて居る。それでエリザは麵包をその小娘にも與つた。

エリザはまた老婆にも與つた。

老婆は麵包を咬りながら、

『水を進げませうか』

と訊ね、暫らく經つて、

『一同も咽喉が空焦びて居る……水桶は其處にある筈だが……』

エリザは老婆に井戸の在所を訊ね、水桶を握つて水を汲むで來て、一同にも飲ましてやつた。

それから男にも麵包を與らうとすると、男は、

『私は食べられない』

と言つて食べなかつた。

あとでエリザは町へ出て、肉や鹽やバタ等を買つて來て一同に食べさせた。

(五)

それを男も老婆も食べた。

ことに小兒達は食べ終ると皿まで舐めて、ごろりと横になつたかと思ふと、ぐう〜〜言つて眠つて了つた。そこで百姓と老婆は自分達の身上話をはじめた。

『俺等は富者ではなかつたゞが、まあ普通には暮して行けたのだ……だが去年の秋は何も穫れないで持合せをその儘居食ひして居たゞ、始めはそれでも善かつたけど、漸次持合せが無くなると、何うにも彼うにも、やり切れないだ。それで富者に拜む樣にして、助けて貰つたものだ、ところがそれも暫らくで、何と賴むでも應はなくなつて了はれる……それかと言つてまさか乞食も出來ないぢやありましねいか……では思つてやる仕事も探けても無い、たゞ途方に暮れて了つたゞ、それに此な時は普通一倍、誰でも彼でも口を探けてるものだからな……

『でもある日職があつたかと一安心して働きだすと、明日はお拂ひ箱となる、是では大變だと、また探けにかゝつたがもう何もない。そこで此の老婆は娘を伴れて、遠方へ物を貰ひに出懸け、少しは何かに有付いた

が、それも僅の暫らくで……斯うして俺達は秋の收穫を待つて居たのだ……それが春時分になると、誰も物を呉れる人がない、その上病氣にまで罹つたゞ……

『一同だん〳〵困つてな、……一日や二日何も食べなかつた事は何度もあるだ。仕方がないから草を食べたゞ、その爲か家内が今度は病氣に罹る……あゝ何うしたものかと思つて居るだがな……』

すると傍から老婆が、

『俺も此の通りだな、何も食はないものだから斯う弱つて了つたゞ、俺や娘に物を貰ひに行けと言ふが、何うして〳〵出懸けられるどころか、斯うやつて臥つてるが關の山だ……その中に所夫は家族を殘して、何處ぞへ行つて了ふし……あ、あ、死ぬ外途がないのかな……』

エリザは此な話を聞くと、エフイムの後を追うて、一緒になるのを止めて了つた。そして其の夜は其處に滯り、翌朝は早くから起き出して、火を造し、老婆達を助けて、何か食物を製造へた。あとでエリザは何か必要物を買ひとゝのへる積りで家を出懸け、食物やら衣服やら買つて來て與つた。

エリザが三日も滯在して居る中に、小兒達は元氣付いて、其邊を走け廻るやうになつた。また小娘も顏に光澤が出だすし、老婆も歩行き出すし、主人は壁などに捕まつて歩行くやうになつた。

エリザは心に、

『漸次可いぞ』

といつて、また獨言のやうに、

『最早出懸けてもよからうか、俺は是でなか〳〵功德をしたわい』

（六）

ところが丁度四日目が、肉を斷食する筈の日に當つて居たので、

『今日はまあ滯つて、斷食をして聖徒に何か供物をしよう』

とエリザは思つて、町へ出懸けて、牛乳や、牛酪や、麵包粉などを買つて、翌日の御馳走の用意をした。

その日になると、一同は大分元氣付いて來て、主人は富者を訪ねて、抵當になつて居る畠と牧場とを、秋まで猶豫して呉れるやうに賴むだけれど、すぐ〳〵歸つて來て、

『あ、あ、』

と嘆聲を吐いて居るから、エリザが訊ねると、主人は、

『でも富者は利子を持つて來なくちや駄目だといつてな』

と話した。之を聽いたエリザは種々と考へだした。他人の奴等は今年は上出來だと喜ひでるのに、此家は抵當になつてるといふ理で、何の役にも立たないのか、それを買ひもどさないで放棄とくなら、此の家族は以前の通り、餓死して了ふやうにならうが……

斯な事をエリザは思ひながら、床に就いたが、何うしても眠られなかつた。然うしてる中にエリザは旅で費つた入費の事など思ふと、何だか心細く感じて來たけれど終に、

『併し一同を放棄つて行く譯には行かない』

と考へた。

その中にエリザは、うと〳〵爲たが、急に誰か自分を起す者がある……

さうして自分は鞄や杖を握つて、門を出懸けて居る所だ。其處へ一人の娘が出て來て、自分の袂を捕まへ、

『祖父樣、祖父樣、あの麵包を』

と强請るのだ、……後方を顧くと老婆と主人とが窓から、自分の行くのを眺めて居るのだ……。

ふとエリザは覺醒めて、今のは夢だつた事が判明つた。そこでエリザ

は心中に、

『畠や牧場を買ひ戻してやらなくては……あ、あ、私の魂はキリストを失ひかけて居る』

翌日エリザは起きると直ぐ富者を訊ねて、畠や牧場を買ひ戻してやつた。それからエリザはまた競賣の馬や牛や荷車を買ふ積りで、市場の方へ行きかけた。すると彼方に兩人の婦人が何か話しながら歩行つて居る。エリザは兩人に追付くと、兩人は自分の噂をして居るのだ。

『あの人かい、初めは私や矢張普通の人だと思つたのさ……何故つたゝ水を飲みに來たと言ふぢやないか……けれどね、あの家の慘狀を見ると、あの穢い家に滯つてね、種々な物を買つては世話をして呉れたんだとさ、世の中にあんな人もあるものかね、眞實に不思議のやうだ……』

エリザは兩人が自分を讃めるのをきくと、急に牛を買ふ事が何だか勿體ないやうな氣がして、だゝ馬だけを買つて歸つた。

それを伴れてエリザが門に來ると、主人は驚いて、

『その馬は何うなさるのだ』

『なに今買つて來たのだ、槽に草を入れてやるが可い』

そこで主人は馬に草を食べさせた。

暫らくして一同は床に就いたが、エリザは一同の眠つて了ふのを見ると、床から起き出して旅の用意をし、肩に鞄を荷負つてエフライムの後を追うて出懸けた。

(七)

エリザが三哩も行くと夜が明けた。彼は一寸木陰に憩うて、何の位金錢を費つたかと調べて見た。金錢は大方費つて了つて、後十七ルーブルスしか殘つて居なかつた。

『あゝ此ではエルサレムまでは迚も行けない、乞食をして行く位なら行かない方が罪が軽からう……それにエフイムが行つて私の爲めにも蠟燭をあげて居て呉れようから……』

とエリザは家へ歸ることに決心した。さう決心すると一日に四十哩づゝも歩行いて、ほどなく家へと歸つて來た。

家へ到着くと家中の者は寄つて集つて大悦をして種々と旅のことなど訊ねた。エリザは途中から引還して來た理は何とも話さなかつた。

『神樣が左樣命じなさつたからだ、金錢は途中で費つて了つた……』

と言つて、殘額を老妻に與へ、今度は留守中の出來事など種々と訊ねた。そして家は平和に行つてるのを聞いて喜むだ。エフイムの家ではエリザが歸つて來たのを知つて、早速やつて來て自分の家の主人の事を訊いた。エリザは、

『エフイム樣はお達者です……私は途中で金錢を費はねばならなくなり、お別れすることになりましたが……』

村の人達はエリザが金錢を途中で費つて了ひ、目的の地まで行かないで歸つて來たのを、何と馬鹿げた事ではないかと、暫らく噂とり〳〵であつたが、それも程なく絶むて了つた。エリザもまたそんな事など直ぐ忘れて了ひ、家中の者と一緒に百姓の事を働いて居た。

(八)

エリザが水を貰ひにエフイムと別れた日、エフイムは少し先へ行つて待つて居たが、エリザは一向にやつて來ない。それで彼は路傍で一眠りしたが、眼を覺して見ると、最早夕方であつた。

エフイムは驚愕いて、

『やれ〳〵此んなに眠つて了つた、エリザは最早先へ行つて了つたらうな』

と思ひながら、彼方を見るとそれらしい人が歩行つて居るので

『あれだらう』

と思つて、エフイムはその人の後を追うて行つたが、その中にその人は見えなくなつて了つた。

エフイムは次の村へ着くと、村の人へエリザの事を訊いて見たが、誰もそんな人に會はないといふから何うも變だと思つたが、また、

『なにあのオデッサで會へようさ……若し其處で會へなければ、船でこそは會へようからな』

途中でエフイムはアッス山の寺院に居る僧侶で、エルサレムへ參詣に出懸けて行く人に出會つた。……僧侶は妙な冠を頂つて、妙な袈裟を着て、髪を長くして居る。

兩人はオデッサに着いて、船の出るまで三日間其處に滯在した。此處には澤山エルサレム行きの巡禮が居たから、エフイムはエリザの事を訊ねて見たけれど、誰も知つてる者はなかつた。

エフイムは船代や通行税などへ四十五ルーブルスを費うて、いよいよ船へ乘込むだ。これを見た伴の僧侶は、

『貴方何故無代價で行けるやうになさらなかつたのですか』

と訊ねた。

『でも拂ふ金錢を用意して來ましたから』

とエフイムは答へた。

はじめは天氣も晴れてたけれど、夕方になると風が吹きだし、雨さへ加はつて、波は甲板を洗ふやうになつた。これに女達は泣き出すものも出來た。エフイムは心中では驚いて居たが、何とも言はないで默つて居た。

その翌日も暴れたが、三日目には霽れて、五日目にはコンスタンチノープルへ到着く事が出來た。此處で巡禮の一部は上陸してセント、ゾヒイヤの寺院へ參詣したが、エフイムは船へ殘つて居た。翌日船はまた出帆して、その翌日にヤフアへ着いた。巡禮は一同上陸して是からエルサレムへ陸行するのだ。それから三日すると、エフイムはエルサレムへ着いた。

一同が本山へ行くと、一人の僧侶が出て來て、各人の足を洗ひ、その足へ接吻をした。その間一同は御題目をとなへ、蠟燭をたてると、御酒を與へられた。

翌日は一同してエヂプトのアー窟からアブラハム寺院、エフバの園それに基督がマグダラのマリヤへ現はれた處などへ參詣した。その途途伴の僧侶はお賽錢の事など話して居た。

お參詣が濟むで、一同は旅舍へ歸つて來て食事をして床に就いたが、その時例の僧侶は懷中を探りながら、

『二十三ルーブルス入の財布を盗まれた』

と叫むで、其邊中それで大騒を始めたけれど、何うしても財布は發見からなかつた。

(九)

エフイムは種々な事を考へ出して眠ることが出來なかつた。

『あの人は金錢を盗まれたのではあるまい。でも何にも金錢を所持つて居なかつたもの……金錢を持たないからと云つて一ルーブルスを私から貰つたではないか』

こんな事を思ふと、急と、

『何故あの人を私は斯う詮議するのだらう……私は罪を犯して居る

もうそんな事は考へまい……』

けれど暫らく經つと、エフイムはまたその人が盗まれたと叫むだ時の厭な聲を想像しはじめた。……そして獨り思ふには、

『金錢など所持ないくせに、奴さん必と何かの計略だな』

翌日早く起ると一同寺院へ懺悔の祈禱に出懸けた。盗まれたといふ僧侶もエフイムと一緒に出懸けて行つた。

一同が寺院へ到着くと、其處には國々の巡禮が群つて居る。ギリシヤの人も居れば、ロシヤの人も居る、アルメニヤの人もトルコの人も、シリヤの人も……そして一同聖門に群つて居ると、澤山の僧侶が出て來て、基督が十字架へ懸り給うた處へ案内した。其處には九本の大蠟燭が燃つて居る。僧侶はその邊を説明して歩行つた。

エフイムは蠟燭を上げた。

それから僧侶は一同を十字架の立てられたゴルゴダの丘へと案内した。エフイムは其處で頻りに祈禱を捧げた。

その中に一同が基督の墳墓へ早く參詣したいと云ひ出したので、其邊中を抜きにして基督の墳墓へと出懸けた。エフイムはまた從いて行つた。

エフイムは一緒に行くあの巡禮の僧侶が何だか厭で〳〵で仕方がない、何うかして別々になりたいものだと思つたけれど、僧侶はエフイムの傍を少しも離れようとしなかつた。

此處は幅がせまくつて一人づゝしか歩行けない、それでエフイムは一緒の僧侶の前へ立つて、頻りと祈禱を始めた。けれど時とすると金錢の事が氣になつてならない。何うしても氣が落付かない、あの人は實際盗まれたのか知ら、必と其な事はあるまい。虚言だ、虚言だ……併し實際盗まれたとすれば、私のも盗まれないとも限られないが……。

（十）

エフイムは尙祈りをして、急と前方を見ると、明燈が三十六臺も燃つて居るあたりに禿げた頭の老人が立つて居る。それが何うしてもエリザのやうで仕方がないのだ。

エフイムは心の中に、

『何うもエリザのやうだ、けれど其な筈はないが、彼奴が私より先に來てるといふ法はないからな……私達が乘つた船より一週間前に出た船にでも乘つたのか知らむ。そんな筈はないが……はて私達とも一緒に乘込はしなかつたし……』

こんな事を考へて居ると、前の老人は跪むで何か祈禱はじめた。暫らく經つとまた顏を擧げたから、エフイムはよく見ると、矢張エリザだ。黑い髮や、眼や、鼻や、何から何までエリザ其儘だ、これはエリザに違ひない。

エフイムは然う思ふと、道伴が出來たので大變嬉しくなつた。けれど何うして自分より先きに來たのだらうと驚いた。

『賢い奴だ、私より早く來るなんて、必と誰か助けて早く來さしたに違ひない――その邊に席はないかな、エリザの奴私の席を探して呉れゝば可いに……』

エフイムはエリザを見失ふまいと注意して居た。集會が濟むと群つて居る澤山の巡禮は、一同大騒ぎして、十字架を接吻しようとする。それでエフイムもその方へ押されおされ行つた。

不圖エフイムは此時また財布が氣になり出した。それで一寸財布を手でおさへて門の方へと出て來た。それからエフイムはエリザを探して見たが、何處に行つたのか見付からなかつた。

寺院の周圍には澤山の巡禮が、飲むだり、食べたりして居る。中には眠

つて居るものもある。エフイムはその中にエリザが居ないかと探して見たが、何うしても見付からなかつた。

その夜エフイムと一緒の僧侶は宿へ歸つて來なかつた。歸つて來ないとなると何か物足りないやうに感じた。翌日エフイムは船で一緒になつたタムビーといふ老人と、また基督の墳墓に詣でた。そして昨日のやうに祈りを爲て居ると、また燈明の下にエリザが見えた。

『眞實に間違ひではないな』

とエフイムは思つて、その方へ行きかけると、急とエリザが見えなくなつた。三日目にもエフイムはエリザが同じ場所に居るのを見た。

『や、居るな』

と思つて、

『今日こそは入口で待つて居よう』

とエフイムは早く入口へ出て、一同の出て來るのを待つて居た。ぞろぞろ人が出て來て、最早一同出て了つたがエリザは何うしたのか見えない。

エフイムは六週間エルサレムへ滯在して居た。そして其邊中ベツレヘムにも、ヨルダンにも行つて見た。ヨルダン河では瓶に水を入れて持つて來た。その中に大方金錢を費つて了つて、後には旅費だけしか殘つて居なくなつたから、エフイムはエルサレムを立つて家へと歸りかけた。

（十一）

エフイムは歸りかけたが、路がだん〳〵家に近づくに從つて、自分の留守中の事など種々胸に浮むで來た。

『子供達は仕事を甘くやつたらうか、泉水は水が出たらうか、家畜は冬

中何な鹽梅であつたらう……建築も出來上つたらうか……』

エフイムは去年エリザと別れた邊まで來た。その邊の者は勿論エフイムを忘れて居るに違ひない。去年は此邊は飢饉であつたが、今年は作も豐饒つたと見えて、一同が樂しさうに暮して居るやうだ。

その中に夕方となつた。エフイムはエリザが自分と別れて、水を貰ひに行つた家の前まで來たすると其處の小娘がエフイムの方へ走けて來て、

『祖父樣、祖父樣、私の家に來つしやいな、ねー』

エフイムはその言葉を聞き棄てゝ、其處を行過ぎようとしたけれど小娘はエフイムの衣服を捕へてなか〳〵離さうと爲ない、そして自分の家の方へ頻りと引張つて行く、そこへ子供を抱いてる女が戸口から出て來て、兩人の有樣を見ると、

『まあ何卒か御這入りなさつて、晩餐でも食べていらつしやい。……何なら御泊りなさつても宜しうムいますよ……』

この時エフイムは心中で、

『エリザの事を一つ聽いて見ようか』

と思うたので、案内される儘にその家へと這入つた。すると先刻の女は肩から袋を下して、水を吳れて手足を洗はさせた。――そして机の傍の椅子へ腰懸けさせた。

女は種々な食物を持つて來て、頻りとエフイムに御馳走した。エフイムは丁寧に禮を述べた。すると女は頭を振つて、

『何故そんな御禮をなさるのですか、私達が他處の方を僅の少し御世話する譯は、私達が他處の方に生命を頂いたからです……私達はその時分神樣の事など悉皆忘れて了つて、何の理もなく暮して居たのです、それで神樣は私達を罰して死ぬより外に途のないやうにして下さいました。處がある老人の方が見えまして、私達に水を飲まして吳れと仰

しやいましたが、私達の憐れな樣を御覽になると、大層氣毒がり、反つて私達に種々な飲物や食物を下さり、そればかりか種々介抱までして下さり、またその上地面や馬などまで買つて下さいました』

その女は斯な事を話して居ると、一人の老母が來かゝり、女の話を引ついで、

『私達はその方は天使かしらん、それとも人間かしらむと今尙疑つて居るのです……眞實に種々御深切にして下さいました。そして自分の名は何うしても仰しやらず、今ならよく御顏でも拜見しておくのでしたが、其頃は最早死かけて居たので、それどころではありませんでした』

それから一同してその人が何うしたの、斯うしたのと話してきかせた。

丁度其處へ男達も野良から歸つて來て、またエリザの事で話が持ちきつた。

『ですから若しその方が來らつしやらないのなら、私達が以前に罪の裡に死むで了つたのです……その頃私達は失望して、神や人を呪つて居ました、けれどその方が私達に生命を下さつたのです、私達はその方の御蔭で、神樣の事と人の深切の事を學ぶことが出來ました』

と言つて、百姓達は跪き、

『神樣あの方を惠むで下さい』

と祈り、また言葉を改めて、

『私達は以前は獸同樣でしたが、あの方の御蔭で人間になれたのです』

此な話を爲ながら、一同はエフイムに種々御馳走をした。食事が濟むと、疲れて居ようからと一同は直ぐエフイムに床を敷いてやり、自分達も床に就いた。

エフイムは床に就いたが、何うしても眠られない、エリザの事が種々と胸に浮いて來る。――その中にエルサレムで三度エリザを見た事を

思ひ出し、

『何うして私の前方に坐つて居たのだらう……神樣は私の骨折を嘉して下さつたか何うか判明らないけれど、何でもエリザの方は嘉しなさつたものだらう』

と思うた。その翌日エフイムは百姓一同から小饅頭の土産など貰つて、また旅に出懸けた。

（十二）

エフイムの旅行は丁度一年も經つた。彼が村へ歸つて來た時は春であつた。夕方エフイムは家に到くと、子息は居ないで、居酒屋へ行つてると聽いた。成程歸つて來た時には酒臭かつた。

エフイムは自分の留守に子息が結婚した事や、財產を浪費した事や、日々怠けて居ることなど聽いた。それで子息が歸つて來ると、エフイムは大變に怒つて叱つたが、子息の方でもなか〳〵默つて居ない。

『そんなら何も巡禮など爲ないで、家に居れば可かつたではないか……それに金錢も自分で持つてさへゐれば可かつたらうに……』

と反抗したので、老人は尙怒つて終に子息を打叩つた。

翌日エフイムは子息の事を村長に話して、何うか後の方針を定めようと出懸けたが、途中でエリザの門前を過ぎた。――見るとエリザの家內が戸口に立つて居る。

家內はエフイムを見ると、手招ぎして、

『御早うムいます、何時御歸りでしたか……旅は如何でムいました』

エフイムは立どまつて、

『や、有難う、何も彼も都合はまづ上乘でした。貴女の旦那樣には途中で御別れして了つたが……まあ何の事もなくお歸りで何よりでした』

その老女は一體話好きだから、直ぐ、

『はいづッと以前に歸りました。さう基督昇天祭の頃でしたか？……私達は急で驚愕りしましたが、まあ無事なので大變喜びました……何と云つても留守は寂しうムいますからね、あの年齢ですから、何の働きも出來ませんが、主人が居ないと何かにつけて困ることが出來るものでムいますよ……それに子息達も良人が居ませんと「御父樣が居ないとまるで火の消えたやうだ」など言つて、寂しがつて居ましたが、まあ何よりでムいました』

『御在宅ですか』

エフイムは一寸口を挾れた。

『はい在宅ります、あの蜂園の方へ……今年は蜂蜜の出來が大變良いと言つて居ります……まあ何卒か彼方に行しつて下さい、大變に喜びませうよ』

エフイムは斯う言はれて、裏の蜂園の方へ行くと、エリザは樺樹の下で、手を擧げて上方を眺めて居るが、頭のてか〳〵してる樣は、あのエルサレムで見た時そつくりである。

樺樹の下には太陽が輝いて、エリザの頭にあたつて、五光を發してるやうに見える。エフイムは靜に立つて、彼を見て居ると、先刻の老女がエフイムの來た事を良人に聲かけた。

エリザは振顧ると、エフイムが立つて居るから、

『や、神樣の御惠で、まあ御機嫌よく……旅は如何でした』

『旅はまづ無事でしたが、あのヨルダン河で聖水を携つて歸りましたよ……けれど神樣が私の骨折を御喜びなさつたか疑問です……』

『なに勿論御喜びで……』

『私は貴方が滯在つてゐなさつた家へ歸途に宿りましたが……』

斯う言はれてエリザは驚いて彼を熟視めたが、その事に就いては何

ども話を進めなかつた。

エフイムは嘆息を吐いて、自分の家の事など考へ、エリザをエルサレムで見た事など何も話さなかつたが、神は各自の人をして、その死に至るまで愛と善い行爲とを以て、この世を善くしたまふ事を知つた。

神の教子

目にて目を償ひ、齒にて齒を償へと言へること有るは、爾曹が聞きし所なり。然れど、我なんぢらに告げん惡に敵する勿れ……（馬太傳五章三八、三九）

仇を復すは我にあり、われ必ず之を報いんとあればなり……（ロマ書十二章十九）

（一）

ある處に一人の百姓が住むで居た。ある日赤兒が生れたので、その喜び一通りでない。

直ぐ近隣の人に依頼むで、赤兒の敎父になつて貰はうとしたけれどその人は何うしても承知して呉れなかつた。仕方がないから他の人に頼むだが矢張承知して呉れない、これは百姓が貧乏であつたからだ。

百姓は村中頼むで歩行いたけれど誰も承知して呉れないので、やゝ途方に暮れたが、そんな事して居る塲合でないから、直ぐ次の村へと出懸けて行つた。所が途中で一人の見知らぬ人に出會つた。

『お早う』

と挨拶したのが口切りで、兩人は種々な話をしたが、その中に百姓は子供の生れた事と、誰に頼むでも敎父になつて呉れる者のなかつた事をし、を〳〵話した。

するとその人は、

『では私が敎父になつて上げよう』

と言ひだした。斯う言はれて百姓は大變に喜び、厚く禮を述べて、

『では敎母は誰を探しませうか』

と訊ねると、

『さう敎母ですか、敎母ならこの先きの市の四角に住むでる商人の娘にお頼みなさい、確と承知して呉れませうから』

百姓は心配らしく、

『でも、商人と仰しやれば富者ではありませんか……』

『なに、そんな心配するには及ばない、まあ行つて頼むで見なさい……』

して式は明朝行ることにしませう』

百姓は家に歸り、再び市へ出て商人の家を訪ねた。すると商人が出て來て、

『何の御用で』

『はい實は……私に子供が生れたので厶いますが……あの貴方の娘御さんに敎母になつて頂きたいので……』

『して式は何日なさいますか』

『はい、明朝』

翌日敎父も敎母も百姓の家を訪ねて來た。そして兩人して赤兒に洗禮の式を實行こして呉れた。式が濟むと、敎父は直ぐ家を出たが、それなり何所に行つたのか、もう誰もその人を見るものがなかつた。

(三)

赤兒は親に可愛がられて漸次成長くなつた。その中に十歲になつたが、身體は丈夫で悧潑く、然も温和いので一同に可愛がられて居た。

十歲になるとその子は學校に行き出したが、大變悧潑だから、他の子供なら五年もかゝる所を、唯の一年間に習ひ終つて、最早學校に行く必要もなくなつた。

その中にその年の聖週間が來た。それで子供は敎母の家を訪ね、復活祭には家に來て呉れるやうに賴み、家に歸つて來て、

『お父樣、僕の敎父といふ方は一體何處に住むでるんですか、僕その人を訪ねて復活祭の御祝をしたいのですが……』

父は、

『ところがその方は何處に住むでるのか一向判明らないのだ、何うも仕方がない……お前の洗禮式をやつて貰うた日から、その方は何所に行つて了つたか判明らないのだ……』

すると子供は熱心に、

『では今から僕が探して來ようそして何處かで會つて復活祭の挨拶を爲て來ますよ』

と言つて、子供は家を出懸けて行つた。

(三)

子供は家を出懸けて、市の方へ行きかけたが、途中で一人の見識らぬ人に會つた。その人は子供を見ると一寸立止まつて、

『お早う……お前は何處から來たのだい』

と訊ねた。すると子供は、

『僕は復活祭の喜びを教母に言つて、それから家に歸り、今教父の住家を探してその挨拶をする積りなんです。僕お父樣達に、その方の家を問ねたが、お父樣は、「私達にも判明らないんだ、實はお前の洗禮式をして下さつた日から、何處かへ行つて了ひなさつて、その生死さへ判明らないんだ」と仰しやつて、何が何だか判明りませんが、僕殘念ですから、一つその方の住家を探しあて、見たいと思うて、今出懸けた途中なので

す』

するとその人は、

『然うか、お前の訊ねるその人といふのは私の事だ』

と言つたので、子供は大變に喜び、まづ挨拶をした。

暫らくして子供は改まつて、

『そして貴方は今何處に行らつしやるのですか、貴方、僕の家の方へ行くのなら、一寸で可いですから、僕の家へ寄つて下さいませんか、それとも貴方の家へ直ぐお歸りになる所なら、僕が一寸お寄りしたいのですが……』

『けれど今生憎一寸閑暇がないのだ、いま村へ仕事に行く途中でね、併し明朝は家に居るから訪ねておいで』

『お家は何所です』

『何でも日の出る方へ眞直ぐに行くのだ、すると森に出るからね、その

森を過ぎると、金の柱の家が島の中に建つて居る、その家が私の所だ』とその人は言つたが、言ひ終ると間もなく何處かへ行つて了つた。

(四)

子供は話された通りに行くと、成程森があつて、其處に一本の松があり、松には一本の繩が懸つて、その先きに重い櫂の丸太が縛りつけてあつた。また丸太の下には蜂蜜の這入つてる桶があつた。

子供は何うして其な所に蜂蜜の桶があるのかと思うて居ると、――その時彼方に木の裂けるやうな音をさせて、母熊が一年子と赤子の熊とを率れてやつて來た。

母熊は其處まで來ると、暫らく鼻を鳴らして居たが、桶の方へやつて來て、桶の中へその鼻をいれて子熊を呼むだ。呼ばれて子熊は走けて來たが、その蜂蜜を見ると直ぐ中へ飛び込むだ。

すると上にぶら下つて居る丸太が子熊の横腹を突く、これを見た母熊は前足をもつて丸太を彼方へ押しやつた。すると丸太は一層搖れだして、一層烈しく子熊の横腹を突いた。それで子熊は泣き出した。これを見た母熊は怒つてまた前足で尙烈しく丸太を彼方へ押した。けれど直ぐ丸太はまた桶の所へ一層強く戻つて來た。此度は母熊は一層烈しく丸太を刎ね飛ばした。さうしておいて親子の熊は蜂蜜を食べようとしたが、またも丸太が落ちて來て、母熊の横腹を強くついたので、母熊はうんと言つたなり其處へ死むで了つた。それを見た子熊は驚いて逃げだした。

子供はこの有樣を見て居たが、何と思つたか彼方へ歩行きだした。暫らく行くとある庭に出た。その庭には黄金の柱の立派な家が建つて居る、そして敎父が門の傍に立つて居た。

子供は敎父に挨拶をすると、敎父は子供を導いて門を這入つて行つた。直ぐ兩人は庭に出たが、その庭の美しさ、まあ自分は夢でも見てるのではないかと思ふ位だ。

程なく敎父は子供をその家へ導いた。この家はまた庭よりも一層立派だから、子供は一層驚いて了つた。敎父は子供を彼方の室、此方の室へと案内した。その中にある戸の閉ざして、封印のしてある所へ來た。此方へ來ると敎父は子供に向つて、

『お前はこの戸の中を見たいだらうが、此處を開けては不可ないのだ。そこの通り開けないやうに封印がしてある。ね俺はお前に言つて置くが……お前はこの樂しい立派な家に何時までも住むで可いけれどだ、この戸を開けては不可ないぞ、え……よく判明つたか、……それでだ、若し俺の言ふ事に反いて戸を開けると……そらお前があの森で見たやうな事が廻ぐりあはせて來るぞ、可いか』

と言つて、それなり敎父は何處かへ行つて了つた。

敎子はたゞ一人で其處へ殘されたが、物珍しくはあるし、別に何不自由もないので樂しく暮して居た。

三年が經ぎた。……敎子は樂しく暮して居たが、封印のしてある戸口へ來る度に、

『何故敎父は戸を開けるのを自分に禁じたのだらう、何うも私開けて見たいな、何なものが中にあるだらうか』

と思うて、戸を開けて見たくつて堪らなかつた。ある日何うしても開けて見たいので、敎子は敎父が堅く禁じたに係はらず、その戸をうんと押して見た。すると戸に爲てある封印が破れて、戸は開いた。それで敎子は中に這入つて四方を見渡したが、その室の美しさ、迚も他の室など較べ物にならない位だ、まるで何から何まで黃金づくめで、そして眞中にこれも矢張黃金製の玉座があつて、その上に一本の杖が置いてあつた。敎

子は物珍らしげに、その杖を手に握つたが、その時急に雷の鳴るやうな音がして四方の壁がハッと開いた。

見ると四方は全世界が見えるのだ。――海も船も、かと思ふと右方には異邦人の住むでる國、左方には基督敎徒の住むでる國、けれど露西亞人の住むでる所はまた別にあつた。

これを見て居ると急に敎子は、

『一體家の者は何うして居るだらう……え、五穀は能く實つたかしらむ』

と思ひ付いて、野原を見渡すと、其所へ一臺の馬車が通つて居る。敎子はそれを自分の親爺だなと思つて、よく見るとバシルといふ盜賊であつた。それで敎子は、

『親爺さん、貴方何か盜まれますよ』

と高らかに叫むだ。

その時親爺は丁度野の物を何か盜まれはしないかと夢みて居た時だつたから、急に起き上つて、

『一つ見廻つて來よう』

と馬へ乘つて野の方へ出懸けた。――野に來て見るとバシルが居るから、親爺は奴一つ捕まへてやらうと、近隣の人を一人頼み、二人してその盜賊を捕まへ、鞭打つて獄屋へ入れた。

その時敎子は敎母の住むでる市の方を見ると、敎母は既に結婚して居たが、その良人といふのがなか〳〵の道樂者で、妾狂をして居る。それを見た敎子は、

『敎母さん、貴女の良人は惡い事を爲て居るではありませんか』

と敎母へ敎へてやつた。それで敎母は直ぐ良人の行つてる所へ出懸け、妾を叱り付けて、良人をその女から引き離して來た。

また敎子は母親を見ると、まだ眠つて床に居たが、その隙を窺つて盜

賊が丁度家へ這入らうとして居る。それで敎子は母親に叫びでそれを注意してやつた。すると盜賊は母親に斧を投付けて逃げようとした。この有樣を見た敎子は堪らないで、自分の持つてる杖を盜賊に投付けて、それを殺して了つた。

(五)

敎子が盜賊を殺した時、開いて居た四方の壁が急に閉ぢて、以前のやうな室となつた。其所へ戸を開けて敎父がやつて來て、敎子が玉坐に居るのを見ると、それを引ずり下して、

『お前は俺の命令に反いたね、そして第一には不可といふ戸を開けるし、第二には玉座へ上つて杖を取るし、第三には世界の惡事を助けるし、……お前は此な惡い事を爲たのだぞ、……若しお前が此處に一時間も坐つて居ようものなら、人類の半分位は滅びて了ふ所だつた』

と言つて、敎父は玉座にある笏を握つたかと思ふと、またも四方の壁がパッと開いた。そこで敎父は敎子に向ひ、

『お前が父親に何を爲たかを御覽』

と言つて、敎子にその方を見させた。

『バシルは終に一年獄屋へ這入る、それが爲めに反つて種々な惡い事を覺えるやうな仕末になつた。――そらお前の父親の馬を二頭盜むだかと思ふと、今度はお前の家に放火をしたではないか……お前は父親に何を爲たかゞお前判明るか……』

敎子は見ると、自分の家がいま燃えて居るのだ。そこで敎父はまた、

『お前の敎母を御覽、良人に嫌はれて自暴酒を飲みはじめた。良人は良人で他の女と關係をはじめた。以前の妾は肉體も靈魂も滅して了つた。……お前は敎母に自分が何を爲たかゞ判明るかね』

そこで敎父は敎子にその家の方を見させた。すると母親は罪で泣きながら、

『盜賊があの時私を殺して居て呉れたら、私今時分は此な種々な罪を犯さなかつたらうに』

と言つて居る。敎父は、

『何うだお前は母親へ何なことを爲たか判明るかね』

そこで敎父は盜賊を見させた。

『その盜賊は九人も人を殺したのだが、それをお前が此度は殺して了つたのだ、そしてお前はその罪を皆背負つたのだ……あの母熊を見るが可い、丸太を彼方へ刎ね飛ばし〳〵やつて居たが、終に自分を殺して了つたではないか、――お前も亦其通りだ……今私はお前に三十年の時をやるだからその時に世界へ行つて、盜賊の罪を償ふが可い……若しお前がそれを償はないと盜賊と同じ運命に會はなければならないぞ』

すると敎子は、

『何うして罪は償へますか』

と訊ねたが、敎父は、

『何でも太陽の出る方へ向いて行くのだ。すると人の住むでる森へ出る、其處でお前はその人達の爲る事に注意して居るが可い、……またその森にある巖窟に、一人の老人が住むで居る、お前はその人を訪ねて、その人の敎へて呉れた通りにさへすれば、盜賊の罪も亦自分の罪も償ふことが出來る』

と敎へて呉れた。敎子はそこで門を出た。

（六）

それから敎子は行く道々斯な事を頻りと考へた。

『自分は何うして世界の惡を滅ぼすことが出來よう……人は惡人を獄屋へ押込めて、惡を滅ぼさうとする、また遠方へ流刑にすることもある……けれど實際人の罪を負はないで、罪を滅す道はないだらうか』

斯な事を考へながら敎子は歩行いて居たが、一向整まつた善い考へも湧いて來なかつた。

その中に敎子はある畑へ出た。その畑には今五穀が實つて、收穫を待つて居る。そしてまた何うしたのか、その畑の中へ一頭の犢が迷ひ込むで居た。それを百姓達が彼方からも此方からも寄つて集つて、頻りと畑の外へ追ひ出さうとして居る。けれど百姓達は四方からそれを追ひ立てるので、犢は何處へも逃場を失つて、反つて畑を荒して居る。

これを傍で見て居る一人の女が、

『あの人達は私の犢を殺して了ふわ』

と言つて泣いて居る。それで敎子は百姓達に、

『お前達は何を爲て居るんだ、……四方から追ひかけて何うして犢が捕まるものか、それよりあの女に呼むで貰ふが一番ではないか』

と言ふと、百姓達は成程と思つたのか、直ぐ犢を追ふ事をやめて、女に呼むで貰つた。

女は畑の一方で、

『トフルシ、トフルシ』

と犢の名を呼ぶと、今迄跳廻つて居た犢は急に立止つて耳を傾け、その聲を聽いて居たが、その聲のする方へ走けて行つた。そして女の裾に鼻を當てながら尾を振りだした。

これを見て百姓達は大變に悅むだ。

敎子はまた目的の方へ歩行きだしたが道々、

『いま自分は惡が惡のために一層烈しくなるのを知つた、一同は惡を

惡で追出さうとしたけれど、追ひ出せるどころか、反つて漸次惡くなつて行つたではないか……すると何うしたら惡を滅す事が出來るのだらう、自分にはまだそれは判明らない……』

と思ひながら、敎子は頻りと考へたが矢張好い考は起らなかつた。

(七)

漸次行くと或る村へ出た。敎子はその村の一番外れの家で、今夜一夜泊めて呉れないかと賴むだ。すると一人の女が出て來て、敎子を案内して家へ入れた。

その女は今室を掃除して居るのだ。それで敎子は傍に腰掛けてそれを見てゐた。すると女はまづ室を拭いたが、それが濟むと汚れて居る布で卓子を拭きはじめた。けれど幾何拭いても卓子は一向潔いにならない、何遍も何遍も拭くが矢張同じ事である。

それで敎子は口を切つて、

『貴女は何故そんな事を爲さるのですか……』

『それでも聖日が來ますから、卓子を清潔にしてるのです、けれど御覽の通り私が何度拭いても、些とも卓子は清潔になつて呉れません』

『それは其筈です、何故貴女は拭く布をまづ清潔にしときませんか……清潔な布で拭けば、卓子は直ぐ清潔になります……』

斯う言はれて、女は清潔な布を持つて來て、卓子を拭いた。すると一度で卓子は清潔になつて了つた。

その翌日敎子は女に別れて、また歩行きだした。彼は漸次行く中に森に出たが、その森には多勢の百姓が車の輪に箍をはめようと大騒ぎして居た。そのはめる箍が何うしても甘く行かない、これは箍をはめるに使用ふ滑車が惡かつたからだ。

敎子は之を見て、

『何うしたのです』

と訊ねると、

『今籠をはめようとしたのですが、何うしても良く行きません』

『それは滑車が惡いからです』

それで百姓達は敎子の敎へて呉れた通り、滑車を修繕したら、直ぐ籠をはめる事が出來た。

敎子はまた旅に出懸けた。暫らくたつと牛賣人達に出會つた。その牛賣人達は路傍で火を燃して居る。まづ枯枝に火を點けたが、その火が點いたかと思ふと、一同は濕つた柴を澤山その上へ載せた。それで折角點きかけた火は消えて了つた。そこで一同はまた枯枝を持つて來て、火を點けたが、それが少し燃えつくと、またも濕つた柴を載せた。それで火はまたも消えて了つた。何度しても駄目だ。

敎子は一同に、

『その上に柴を載せるから不可のです、初めの枯枝を燃して、よく燃え付いてから、それをお載せなさい』

牛賣人達は敎子の敎へて呉れたやうにやつて見たら、成程今度はよく燃え付いた。

敎子はまた旅に出懸けた。道々一體今迄見た事には何な意味があるのだらうと思うたが、何うしてもその意味といふのが判明らなかつた。

(八)

敎子はまた終日歩行くと、巖窟のある森へと到着いた。その巖窟に行つて、彼は戸を叩くと、中から返事が聞えた。

『誰樣』

『罪人です、私は人の罪を償ふために來たものですが……』

すると老人の聖い人が出て來て、

『人の爲めに持つて來た罪とは何ういふものだね』

と訊ねた。そこで敎子は自分の爲た何から何まで一仔始終を話した。—

敎父の事からあの熊の事、それから封印のしてあつた室のこと、敎父の命令けのこと、畑で會つた百姓のことなど話し、

『私は罪で罪を滅すことの出來ない事は判明りましたが、何故それを滅ぼせないのか、それは判明りません』

敎子は斯ういつて、聖い人に向つて、

『何卒かそれを敎へて頂きたい』

と願ふと、老人は、

『尙と種々お前が途中で見たものがあらう、それを俺に話してお聞かせ』

と言つた。それで敎子はなほ女が卓子を布で拭いて居た事、百姓が籠をはめてた事、牛賣人が火を燃してた事など話した。

聖い人はそれを聽いて居たが、直ぐ巖窟へ這入つて行つて、粗末な手斧を持つて來た。そして敎子に、

『さあ來で』

と言つて、傍にある木の傍へ伴れて行き、

『伐つて御覽』

と言つた。敎子は言はるゝまゝに、その木を斧で伐りたふすと、今度は、

『それを三つにお伐り』

と老人が言つたので、またそれを三つに伐つた。すると老人は巖窟から火を携つて來、

『それを燃やすが可い』

敎子は木に火を點けると、木はぽつ〳〵いつて燃えだしたが、幹だけ

は燃えずに殘つた。すると聖い人は、

『ではそれを地面へ半分づゝ埋めるのだ、可いかね』

敎子は言はれる儘に木を埋めると、老人は、

『あの丘の麓に河が流れて居たらう、お前は其處へ行つて、水を口に含むで來るのだ、そしてその燃木に注けるが可い、まづお前が女に敎へたやうに水を注け、次には籠を製へて居た人に敎へたやうに水を注け、それから今度は牛賣人に敎へたやうに水を注けるのだ……そしてその燃木が發芽して、三本の林檎の木が生えたらば、その時こそお前は何うしたら人の罪を滅ぼせるかと云ふことが判明り、また自分の罪は償へるのだ』

斯うその聖い人は敎子に話すと、巖窟の中へ這入つて行つて了つた。後で敎子は種々と考へて見たが、今老人が自分に話して呉れた理が何じしても判明らないのだ。けれどまあ實行つて見るのが一番だと思つて、敎はつた通りにやりはじめた。

(九)

そこで敎子は河へ行つて、口へ水を含むで來ては木に水を注ぎだした。河へ行つて水を含むで來ては注ぎ、注ぎして居ると、その中に身體が疲勞れて了つたから、一つあの老人に頼むで何か食べさせて貰はうと、戸を開けて巖窟の中へ這入つて行つて見た。するとその老人は何時の間にか死んで椅子の上へ臥つて居た。――敎子は驚いたが、四方を見廻すと麵麭の皮があつたから、それを取つて食べた。

またその邊を探したら、其處に鍬があつたので、敎子は老人を埋める墓穴を穿りだした。燃木に水をやるのは夜にして、日中は墓を穿つて居たが、その日堀り終つたから、敎子は老人の死骸を運むで來て、墓穴へ埋

めようとして居た。其處へ村の人達が老人に食物を運ぶので、來かゝつたが、老人が死んで居るので、驚いたけれど、死むだのだから仕方がない、それで村人は食物は持つて來てやるから、敎子にこの巖窟へ住むやうにと勸めた。

その後敎子はこの老人の隱家に住むで、村の人の持つて來て呉れる物で生きて居り、一方では自分の命令かつた事をせつせとやり出した。

其處へ敎子は丁度一年住むだ。その中に彼の聖い名が其邊中に擴まつて、澤山の人がその敎へを聽かうと敎子の所へやつて來た。その中には富者の商人が居て、彼に種々な贈物を持つて來たが、敎子は入用だけを貰つて、他は貧乏人に惠むでやつたので、その名は一層擴りだした。

そして敎子は半日は水を持つて來ては燃木に注け、後の半日は自分を訪ねて來る人に會ひ、種々な事を敎へて居た。けれど斯なことをして居るので、罪は滅ぼされ、自分の罪を償ふ事が出來るのかと考へることもあつた。

ある日の事、敎子は巖窟に坐つて居ると、誰かゞ馬に乘つて、歌を謠ひながら、其邊を通過つて行くのをきいた。はて誰であらうと敎子は外に出て見ると、若い力のありさうな男が、立派な衣服を着て、美しい鞍を良ささうな馬に置いて、乘つて步行いてるのだ。敎子はその男を呼び止めた。

『お前は誰だ、そして何處へ行くのだ』

するとその男は、

『私かな、私は盜賊だ、道を乘つて步行いて人を殺すのだ』

これを聽いて敎子は恐ろしくつて仕方がなかつた。そして考へるには、

『私は何うしてこの人の罪を滅すことが出來ようか、私を訪ねて來る人なら、說いてやつて、その罪を懺悔させることは容易いのだが……こ

の男は自分の惡い事を鼻に懸けて居るのだから、眞實に仕末にをへない……』

斯う考へたので、敎子は默つて歸らうとしたが、その時また此な事が胸に浮むで來た。

『この盜賊が、この邊を乘り廻すとなると、私の所へ訪ねて來る人達が恐つて來なくはなりはしまいか……もし來ない事になると私は何うして生きて居よう……』

それで敎子は立止まつて盜賊へ、

『私を訪ねて來る人達は、一同自分の惡い事を誇らないばかりか、懺悔して罪を許して貰ひたいと祈るが、お前は何うだ。若し神を恐れるならば、悔改めなくてはならぬ……けれどだ、お前が悔改める心もないなら、もう二度と此處へ來ない方が可い。私を煩はせたり、私を訪ねて來る人神達を驚かしたりされては困る……お前が私の言ふ事を聽かないと、は必ず罰しなさるぞ』

と言つて嚇すと、その男は平氣で、

『俺が何で神など恐れよう、……俺はお前の言葉など承知くものか、お前は俺の主人ではない……自分は自分で勝手に信仰でも何でもするが可い。けれど俺は矢張盜賊をして一生を送るのだ……人は何うかして生きなくてはならぬ、御互に爲たい事を爲るのが一番だ、お前は馬鹿老女にでも御說敎をしてやるが可い。俺は御免だ……もし尙と話すなら、俺は明日二人の人を殺してやるぞ、お前も序でに殺しても可いが腕の汚れだ……まあ許しておく……』

と言つて、盜賊はそれなり去つて了つた。――また來るのかと思つて居たが、それから來なかつたので、敎子はまづ無事に八年間を其處で送つて居た。

（十）

ある晩の事である。

敎子は例の如く、水を燃木に灌いで、疲勞れたから、巖窟へ歸つて來て休息して居た。そして村から誰か人が訪ねて來さうなものだと思うて居たが、一向誰もやつて來ない。其うなると何だか頻りと淋しくなつて仕方がない。それで種々な事を思ひ出さずには居られなくなつた。――考へれば考へる程不愉快な感がして、自分の今迄の生活の事など考へつゞけた。

敎子はまづあの盜賊は何故自分を殺さなかつたんだらうと思うた。その中に、

『自分は此な處に隱れて居るが、あの村の人が懸しく、一同が食物を持つて來て呉れるのが嬉しかつたりして居る。あゝ自分はそんな事に貪慾があるのだ……食物、讃美、名譽……自分は矢張迷つて居るのだ……罪を贖ふどころの騷ぎか……愈々罪を犯して居るのだ。では一つ一同から發見からないやうな處へ隱れよう、そして自分一人で暮さう……今迄の罪を贖ひ、新しく罪を犯すまい』

かう敎子は考へて、乾いた麵包の這入つて居る小さい袋と鍬とを持つて、その巖窟を去つた。そして人民から發見からないやうな場所へ、寂しい窟を自分で堀つた。けれど何うしたのかその場所へ、例の盜賊が顯はれて來た。

これを見た敎子の驚きは一通りでない、遁げ出さうとすると、盜賊の方でもそれと知つて、追走けて來た。

『何處へ行くのだ』

と訊いた。敎子は自分はこれ〳〵の事を考へたから、いま誰も發見けないやうな寂しい場所へ窟を堀りに、あの巖窟を去つたのだと話した。すると盜賊は、

『お前は人民が來ない所といふが、それで何うして生きて行く積りだ』

敎子はそんな事は今迄思うて居なかつたが、今盜賊から注意されて成程と思うた。けれど盜賊はそんな事には頓着ないで、それなり行つて了つた。

敎子は、

『併し盜賊は自分の生活の事は何とも言はなんだ……では奴は自分でも後悔して居るのだらう、……一つ聽いて見よう、……今日は大變に温和さうに見えた、……まさか自分を殺すやうなことはあるまい……と思うて、盜賊を呼びかけた。

『おいお前も私も同じく神から遁れることは出來ない』

と言ふと、盜賊は何と思うたのか、馬を返してやつて來たが、帶から小刀を取つて敎子を嚇した。敎子は驚いて森へ遁げ出して了つた。

盜賊は後を追走けては來なかつたが、

『もう二度許してやつたぞ、尙一度自分の所へ來て見ろ、すると殺してやるから』

と言つて、それなり馬で行つて了つた。

その夜敎子は例の如く燃木に水を灌ぎに來ると、三本の中一本が萠むで、可憐い林檎の樹が生えて居た。

（十一）

斯うして敎子は、人々に見られないやうに一人隱れて住むでゐたすると食物が直ぐ無くなつた。

敎子は考へるには、

『では一つ出懸けて木の根でも探す事にしよう』

そこで食べる木根を探しに出懸けると、一つの麵包の袋が木に懸つて居るのを見た。敎子はそれを取つて食べた。食べ終つて見ると他の袋がまた懸つて居る。それで敎子は生命をつないで居た。

けれど敎子の一つ恐くつてならない事は、何うかして盜賊に出會ふまいと、そればかり心配して居た。だから盜賊の來る音を聽くと、斯な事を考へながら遁げ出して居た。

『奴私を殺すに違ひない……けれど私はまだ自分の罪を贖ふ時がない』

斯うして敎子は十年間暮した。その間林檎の木は以前に一本生えたぎりで、他のは昔のまゝであつた。

ある日敎子は、朝早く起きて、例の如く燃木に水を注け、疲れたから休息むで居ると斯な事を考へ出した。

『私は罪を犯して居た、私は死を恐れて居た、……けれど神の御心なら私は死か、その他の方法で私の罪を悔いる事が出來るに違ひない』

その時盜賊は其處へ來かゝつた。すると敎子は尙心に、

『神の外誰も私に善惡を爲ることは出來ない』

斯う思うて敎子は盜賊の方へわざ〳〵出懸けて行つた。

その時盜賊は誰か一人の人を鞍に縛り附けて伴れて居た。その人は手と口とを縛られて靜かに打伏して居た。

敎子は盜賊の方へ來て、その馬の前へ立つた。

『何處へ此人を伴れて行くのです』

と敎子が訊ねると、盜賊は、

『森へ伴れて行くのだ、此奴はある商人の子息だが、俺に親の金の在處を敎へないから伴れて來てそれを白狀するまで强打つのだ』

と答へて、それなり行き過ぎようとした。それで敎子は馬の手綱を引張つて、

『この人を許しておやんなさい』

と言つた。けれど盜賊はなか〳〵その人を許すどころか、直ぐ怒りだして、手に小刀を握り、

『俺の勝手ではないか、……何を生意氣言ふのだ。生意氣言ふとまづ貴樣から殺してやるぞ』

けれど敎子は少しも恐れない。

『さあ何うでもなさい。私は少しも恐くはありません……私の恐れるのは唯神樣だけです。神樣は私にお前をその儘行かせてはならぬと仰しやるのです、……その人を許しておやんなさい』

それで盜賊はいよ〳〵怒り出した。そして小刀の鞘を拔いて繩を切つた。すると商人の子息は自由となつた。

『兩人共惡魔にでも行きあがれ……二度と俺の處へ來るな』

と呶鳴つた。繩を切られた商人の子息は、森の方へ遁げだしたけれど神の敎子は遁げださうとも爲ないで、尙其處へ止まつて、罪の生涯から逃れんことを盜賊に奬めた。

盜賊は敎子の言葉を靜かに聽いて居たが、何とも言はないで、それなり行つて了つた。

翌朝敎子は例の如く、燃木に水を注るつもりで行つて見ると、不思議にもまた一本芽が出て、二つの林檎が生えて居た。

（十二）

また十年間經過ぎた。

その間神の敎子は矢張同じ所に住むで居たが、その中に別に是とい

つて欲しい物もなくなり、恐い物もなくなり、然も心の中には常に悅びが充ちて來た。

或日敎子は斯な事を考へた。

『神は人間に限りない幸福を與へていらつしやるではないか、そして人間は限りなき喜悅の中に居ながら、尙思ひ慮つて居る……』

と思ふと、敎子は人間の淺間しさと、苦痛とを感じて、何となく人間の爲めに悲しくなつて來た。そこで敎子はまた、

『たゞ斯な事を爲て居るのは惡い事だ、迷つて居る人々に話してやらなくてはならぬ』

と思ひ出した。其處へ例の盜賊が來かゝつたけれど敎子は心に、

『奴に話したつて、私のいふ事などわかるものか』

と考へた。それでそんな盜賊など早く行つて了へば可いがと思うたけれど敎子は不圖自分は惡い事をしてるなと考へ付いて、路傍へ出て、盜賊の行過ぎるのを止めようとした。見ると盜賊は何だか鬱した顏付で、地面を見ながら歩行いて居る。それで敎子は一層氣毒に感じて、走け出して盜賊へ追付いた。

そして言ふには、

『愛する兄弟よ、私は貴方の靈に就いて悲しいのです、……貴方の心に神の靈を御入れなさらなくては不可ない。貴方は自分で自分を苦しめ、また他人までも苦しめて居るのです……けれど神樣は貴方の爲めにも確と幸福を準備へて居て下さつてゐます、……兄弟よ、自分で自分を亡ぼしては不可ません。さあ自分の生涯を御改めなさい』

これを聽いた盜賊は眉を蹙めて、

『俺の事など世話つて呉れなくても可いわ』

と呶鳴りながら行つて了はうとした。けれど行けば行かうとする程、敎子は盜賊を確と握つて、そして終に泣き出した。泣き出されて盜賊は何

と思つたか、一生懸命に敎子の顏を見つめて居たが、急に馬から飛下りて、敎子の前へ腰を屈めた。そして、

『老人樣、私はとう〳〵敗けて了ひました。實は私は貴方と三十年間も爭つたのです。けれど今となつては、とう〳〵敗けて了ひました……私には力がない、何うなりと貴方の爲たいやうに爲て下さい……實は貴方が初めて私に何か仰しやつた時分には、私は唯怒つて一層惡い者となりました。けれど貴方が何でも人達からお遁れなさつた折から、私は貴方の言葉に就いて考へ始めたのです、そしてその日から毎日樹の枝へ食物を縛つて置いたのでした……』

斯う聽くと、敎子は以前に女が卓子を淸めるのに、まづ自分の有つて居る巾を淸めてかゝらねば駄目だつた事を思ひ出して、成程自分の事など考へなかつた時、初めて自分の心も、他人の心も淸めることが出來るのだなと考へ付いた

尙盜賊は、

『貴方が死を恐がらなくおなんなさつた時、私の心は開かれました』

と言ふと、敎子はまた繩製造人が繩をはめる時、まづ滑車を確固りしなければならなかつた事を思ひ出して、成程人が死を恐れず、また生命を神にまかせた時、始めて謀反心が從順な心となれるのだと考へ付いた。

尙盜賊は、

『貴方が私を憐み、私の爲めに泣いて下さつた時、私の心は溶け込むで了ひました』

と言つた。これを聽いて、敎子は大變に喜び、盜賊をあの燃木の處へ導いて行つた。すると第三番目の燃木から芽が出て、林檎の木が生えてるのを見た。

そこで敎子は濕つた木に火を點けて居た牛賣人の事を思ひ出して、まづ人は自分の心を燃してからでなければ、他人の心を燃す事は出

來ないのだと知つた。

そして敎子は種々と盜賊に話し終ると、それなり死んで了つた。それで盜賊はその死骸を埋めて、後は敎子が自分に敎へて呉れたやうな生活を送つて、また自分の敎はつた事を他人にも敎へはじめた。

トルストイ家の會食

トルストイ伯の家庭

『豫言者！然り余はトルストイを豫言者以上の人物なりといはむ。彼はヘブリューの豫言的道徳上の狂熱を有すると共に、セークスピヤの如き天才をも有す』

是れフロバートが世界の文豪トルストイ伯を評した言葉である、またブリーシは、十九世紀の最大著述家を選まんと企てた時、

『小説の大著述家中、その第一席はビクトル、ユーゴーか、トルストイ伯のものなり』

と言つて居る。然もビクトル、ユーゴーは既に過去の人であるが、我トルストイ伯は十九世紀の最大長壽者の一人として、今尚露國ヤスヤナ、ホ

リヤナに在る人種から云へば彼は露西亞語をかたる露國民なれど、寧ろ彼は世界の天才の化身といふが適當である。カーライルはナポレオンはゲーテと時代を同うせし事によつて後來人に記憶さるゝに至るべしと言つて居るが、十九世紀より二十世紀の大政事家、大將軍等も同じく彼トルストイと時代を同うせし事にあつて、後來記憶さるゝ時が來るであらう。今この大文豪の家庭は奈何なであるかを考へるのは、文學を愛好する家庭者にとつて最も趣味ある事ではないか。

トルストイ伯の最も愛好さるゝ家は、露國の田舍ヤスヤナ、ポリヤナに建つて居る。英國評論の評論の主筆ステッド氏嘗て伯を此處に訪ひ、その紀行文に斯う書いて居る。

『トルストイ伯の家は、街道から一哩ばかり離れて居るけれど、街道に立つて見ると木立の間に隱見れして能くわかる。街道からの路はだら坂となる、小川に盡き、また上り坂となり、その頂上に白い田舍風の家が立つて居る。是がトルストイ伯の家である、家の家根は普通の露西亞形で鐵板に蔽はれ、正面には石の露臺がある。

木立のあるは一方だけで、他方には小さき花園の附いた廣場があり、子供のクロッケトを遊ぶ處となつて居る。また後方も空地で、その中央に木立がある、この木陰こそ、多くの巡禮者が、繪の樣な形で、集り來つてトルストイ伯に會ふ所である。此處でトルストイ伯は巡禮者に會ひ、聖書にある「爾に求むる者に予へ、借らむとする者を却くる勿れ」を文字通りに行ふのである。伯は巡禮者と挨拶を爲ると、信仰上の會話を初め、濟むと金錢を二ペンス位づゝ與へる、彼等は滿足して歸つて行く巡禮が杖をもち、靴をそろへて、生々した顏で木陰に大小說家と說合ふ、その時、日は西に傾き、女中が牛乳をしぼりに牛小屋にゆく、實に一幅の美しい繪畫である。

また菜園と、廣濶した果實園とが家の後方にあり、東方には清い風通

しの可い「夏の家」が樹立の中にある、又村に行く路の小川の彼方に、トルストイ伯の令妹の婚げるヒータースバーグの裁判官の田舍の別莊がある。

家の後方はるかに牛、鷄、馬等の飼はれて居る飼養場がある。家の前面には三つの池がある、一番大きいのは人々が水浴をして衣服を洗ふ所に當てゝある、第二の池には蛙が始終聲高く歌を歌つて居る。大きな池はなか〳〵清潔で、周圍には木が繁り、木陰には二三の美しい小亭がある。小さい池の岸には伯の母堂の愛して居らるゝ家があり、伯は屢々此處を訪ねらるゝ、此自然の裡に住むで居らるゝトルストイ伯が、平民的で、服裝を始め、總てが單純であるのは見やすい事である。トルストイ伯の服裝は貴族といふ風は少しもない、全く露國の農夫風である。黑色の目の粗い寬い服を着て、胸までボタンを懸け、腰には革の帶を締め、頭には古びた綠の無い帽子を冠き、散歩する時には常に大きな杖を携へて行く、服裝の單純なるはトルストイ宗の一つの標識である。』

トルストイ伯は露國の貴族社會の人達と裏反對の嗜好を持ち、都會を嫌ひ、田舍を愛し、交際社會を忌み、家庭を好むで居る。伯の願望は健全なる家庭を築きたいといふのであるから、その家庭を田舍に築かれたのである。

トルストイ伯の夫人は、莫斯科の醫者の娘で、十八歳の時伯と結婚した。その愛情の濃かなる實に夫妻、理想的幸福と思はるゝ計りである。だから夫人の母は屢々繰返して、

『彼の爲めには、これ以上の幸福な運命を望む事は出來ない』

と言つて居られた。トルストイ伯はまた夫人を非常に尊敬し、何事でも一應夫人に相談せらるゝ、一寸散歩に出懸るにも、

『一つ彼に相談して見ねばならぬ』

トルストイ伯はまた、

『吾は妻の傍に無限な幸福を見出した。彼はたゞ良妻賢母であるばかりでない、わが文學上の著述のためにも明敏熱心なる助手たるを失はない』

と言つて居られた。併し今では莫斯科の家の事、此のヤスヤナ、ポリヤナの家の事、支配の事、命令の事總てが夫人の務である。トルストイ伯の意見によれば、自分が他人よりも立派な家に住むでる事は罪惡で、伯の家族が或は自分達の靴を磨かせたり、食事を整へさせたりする爲に、下女下男等を使役するのは、責むべき、贅澤な事である。だからトルストイ伯が現今斯の如き家族と住むでる事は自分に反抗してる譯で、非常な苦痛な事であらう。それで夫人も出來る丈は伯の意見に從ひ、生活も成るべく簡易にして居る。夏になると、ヤスヤナ、ポリヤナにも多くの人が集つて來、音樂舞蹈唱歌芝居等に日を送るが、トルストイ伯の家族は是等には見向きもしない。若い令嬢等も簡易な衣物を着け、酒は食卓に上せない。その上汚濁なる社會の虚榮、贅澤は出來る丈け少くして居らるゝ。

夫人が結婚後幾何もなくトルストイ伯は『戰爭と平和』の著述に從事せられ、八年を經て稿が出來上つたが、その間夫人は四人の兒等に對しては、母たるの責を盡し『家に對しては主婦たるの務を了へ、傍らその六卷の著述を六回も寫しなほされた事がある。また『生命』と題する心理的書籍の如き、所夫の讀みにくい文字を解し、佛語に飜譯もされたし、また十六回も清書しなほされた如き逸話もある。夫人が所夫に對する同情の程も思ひやられて嬉しい。

今一寸その家庭教育の事を書いて見よう。一體トルストイ伯の教育主義はルソーのエミールに基いて、小兒は成るべく自由に放任し、決して威力を加へてはならぬ、それが小兒を相手にする者の第一の務、また小兒取扱の法則であると、特に傭聘つてゐる女教師等へ向つて要求まれた條件であつた。而して伯は英國が最も廣くルソーの教育主義を實

行してると云ふので、英國から女教師を傭聘ひ、これに兒等の三歳より八九歳に至る者の教育を依賴まれたのである。

またトルストイ伯は兒等をして自然に融合せしめようと努められた。これは獸類昆蟲その他すべての自然界の現象を兒等が怖れず、寧ろ之を愛するやうな習慣を養ふ爲めであつた。だからトルストイ伯は自然の力に較べ、人間の力が如何に薄き事、また小兒は年長者に從順でなければならぬと敎へられた。これ等の敎訓を兒等に敎ふるにも伯は毎時も之を娛樂の間にし、その實例を示さうと一家擧つて伯の如く、人類を愛する思想を腦裏に鼓吹むやうにつとめられた。若し兒等に僞の方行があると伯は嚴格に之を罰せられたが、この罰は傍で見て居て、あまりに嚴格でないかと思はれる位であつた。けれどこの罰を兒等に加へ得る者は伯夫妻に限つて居たのは無論の事である。

また伯は兒等は何事でも眞似る者だと、我が一言一行を謹み、夜八時になつて、兒等が床に這入ると『あゝ、漸とこれで樂になつた』と言はれるのが常であつた。これから漸次年長くなると兒等の敎育は夫人露西亞語と音樂の初步を授け、伯は數學を授け、外國語及び此の他の學科は傭聘んである數人の敎師に授けしめられた。殊に音樂は眞面目な古風のものゝみを知らせ、オペラの如きは全然これを斥けられた。また繪畫は志望のある兒等にばかり敎へられた。併しこれに對する嗜好は幼少い時から養成なふ事に盡力められた。トルストイ伯はまた兒等の學業の成功の遲いのを責めないで、其の進步の方面で稱揚るのを常として居られた。

トルストイ伯一家の生活狀態を言へば、一家の者は早起し九時になると茶を飲む。併しこの時は全一家殘らず集るではない。十時から十時半に、また令孃達は出て來て茶を飲れ、それからトルストイ伯は散步に出て、十二時半頃に歸つて來て一家全體が集つて晝食をする。以後は或

は讀書する者、或は仕事する者、或は散歩する者もある。またこの間に來客があれば引見し、停車場へ書狀を受取に行く、そして日沒に一同歸つて來て晩餐に就く。以後は會談讀書などし、想ひ〳〵に一人一人寢室に退くのである。この簡易な生活は時々友人親戚等の訪問によつて賑かさるゝことあるも、その他の時間はトルストイ伯は獨り世界的大問題を解釋せんと努めて居る。

トルストイ伯の健康は、終日勞働するに適しない。それは漸次老衰の氣味があるからである。トルストイ伯自身も亦死の近きを意識し、それを以て喜ぶべき事であると爲て居る。それで醫者は養生を勸めるが、一體伯はこの養生を嫌ひ、醫者の言葉を卑み、名醫の醫療も注意を拂はない。伯の健康の勝れざるはその菜食主義によると夫人は思つて居る。併し伯は固く禁慾主義を守り、以前喫ひし卷煙草も、今は酒類肉類と同じく禁じて居る。晝食と夕食とには肉類も供へられるが、伯はこれを口にせず、菜食主義を守つて居る。併し茶だけは飲む。伯の贅澤なものを言はゝまつこれだけである。然も之れさへ止めようとして居る。

トルストイ伯は非常に家庭を愛される。だから旅行などより歸り來て、家路近くなるとまづ發せらるゝ言葉は、

『一同が機嫌よくして居れば可いが』

と家族一同の身を氣遣はれるのである。

トルストイ伯は田舍の住宅ヤスヤナ、ポリヤナを最も愛好され、この自然の中に一生を送りたいと願つて居らるゝ、だから冬期此處を去つて莫斯科に行くのを嫌ひ、それを終へて再たヤスヤナ、ポリヤナへ歸るのを非常に喜むで居らるゝ。トルストイ伯は結婚後三十餘年も永住の地としてヤスヤナ、ポリヤナを選定して居るのである。

トルストイ伯が全世界に敎へむとする言行は此の如き土地、此の如き家庭から發して來たのである。

通俗文庫第五編　二人巡禮　終

二人巡禮
定價　金貳拾錢

明治四十一年三月一日印刷
明治四十一年三月二日發行

著作者　百島操

東京府下北豐島郡巣鴨町大字上駒込十九番地
發行者　山縣文夫

東京市京橋區築地二丁目二十一番地
印刷者　守岡功

東京市京橋區築地二丁目二十一番地
印刷所　株式會社國光社

發行所　東京巣鴨郵便區染井御中山縣邸內
電話下谷四百三十八番
振替貯金口座第三百五十五番
內外出版協會

不許複製

偉人研究 第二編

トルストイ 言行錄

中里介山編著

（第四版　定價金三十錢　郵稅四錢）

▲早稻田文學評　手輕な小冊子ではあるが、此の聖人の一生を見るには便利な書である。翁が著作の梗概もあれば、其の懺悔錄前後の精神的經驗も或度までは察せられるやうに書いてある。其の家庭生活の模樣など、何度聞いても興味ある記事である。

▲中央公論評　言ふも古し、レオ、トルストイと云へば日露相鬩ぐ時にも何人にも贊嘆の聲を絕たれずに居つたのである、氏の思想必ずしも偉なりとはせぬ、氏の雄定評ありではあるが、英譯位で見る我々には雷同する權利を持たぬ、が如何なる斷片を手に觸れても常に打たれるのはその眞摯熱誠の點である、此一事氏が敬慕すべき當代の偉人であることを疑はぬ、此著簡略ではあるが、能く翁の風采を寫して居り、文章も官文一致で極めて分り易い。

▲新公論評　偉人研究の第二編として出でたる本書は、青年文士中異彩を放てる介山氏に依つて著はさる、杜翁は現代の聖者、今の世にありて杜翁を知らざるは最大の恥辱なり、而も其基督以來の大人格を描かんとするは容易の業にあらず、先づ以て本書の如き通俗的言行錄の出でたるを欣ばずんばあるべからず。

元版　內外出版協會
東京巢鴨郵便區染井山縣邸內
振替貯金口座第三百五十番

SHORT STORIES AND LEGENDS

LEO TOLSTOY

トルストイ 短篇集

百島冷泉譯述

（再版　定價　金參拾錢　郵稅　四錢）

『神の審判』『高加索の囚人』を始め、悲慘なるもの無邪氣なるもの、莊嚴なるもの、凡てトルストイ翁の短篇小說十一篇を收めたり。譯振り又忠實なる逐字譯にして些も暇澁なる點なく、詞句穩健にして修飾の厭味なき所頗る原文の率直にしてナレーチーブなる體に適へり。トルストイ翁を渴仰する者は更にもいはず。世の力ある溫き神父の樂しき訓話に渴する者は、必ずや一本を携へて此十一篇に何等かの偉大なる天啓を聞く所なかるべからず。……（萬朝報）

トルストイ翁は思想界の光明なり。文壇の巨手なり。世界が翁の偉大を稱揚する所以も亦翁がよく趣味と教訓とを合一するところにあり。此書は翁の短篇物語十一篇を收めたるもの、偉人の面目は全然之を以て推す可らずと雖も、また以て此偉人が如何に世道人心の歸趣を敎ゆるに藍率しつゝあるかの一般を察すべき也。加ふるに譯文極めて平明暢達なく內容を相調和し、何人も興味を感ずべく、而して何人も面白く讀過の際無限の光明と教訓とを感受し得べきなり。……（ハガキ文學）

元版　內外出版協會
東京巢鴨郵便區染井山縣邸內
振替貯金口座第三百五十番

偉人研究

（第一編）リンコン言行錄　呼上賢造編著
（第二編）トルストイ言行錄　中里介山編著
（第三編）ガーフィールド言行錄　中里介山編著
（第四編）フランクリン言行錄　中里介山編著
（第五編）グラッドストン言行錄　呼上賢造編著
（第六編）二宮尊德言行錄　中里介山編著
（第七編）ローズヴェルト言行錄　加藤信正編著
（第八編）ワシントン言行錄　百島冶泉編著
（第九編）山鹿素行言行錄　渡邊修二郎編著
（第十編）中江藤樹言行錄　中里介山編著
（第十一編）貝原益軒言行錄　秋山悟庵編著
（第十二編）ルーテル言行錄　松本赳編著
（第十三編）大石良雄言行錄　波邊修二郎編著
（第十四編）聖德太子言行錄　秋山悟庵編著
（第十五編）吉田松陰言行錄　五十嵐越郎編著
（第十六編）渡邊崖山言行錄　渡邊修二郎編著

定價金參拾四錢　郵稅四錢
定價金參拾四錢　郵稅四錢
定價金參拾四錢　郵稅四錢
定價金參拾四錢　郵稅四錢
定價金參拾四錢　郵稅四錢
定價金參拾四錢　郵稅四錢
定價金參拾四錢　郵稅四錢
定價金參拾二錢　郵稅四錢
定價金參拾四錢　郵稅四錢
定價金參拾四錢　郵稅四錢
定價金參拾四錢　郵稅四錢
定價金參拾四錢　郵稅四錢
定價金參拾四錢　郵稅四錢
定價金參拾四錢　郵稅四錢
定價金參拾四錢　郵稅四錢
定價金參拾四錢　郵稅四錢

元版　東京振替貯金口座　郵便區染井第三百五十五番　鴨巢山邸內　內外出版協會
元版　東京振替貯金口座　郵便區染井第三百五十五番　上駒込邸內　內外出版協會

スミス夫人原著　文學士　皆川正禧譯述

道の母

名一

小兒の教育

全文フリガナ附　定價金貳拾錢　郵稅二錢

おかアさまの讀本ができました

母たる人の最終の目的は小兒を完全に教育することであります智育、德育、體育共に圓滿に發達した理想的の小兒を育てあげることであります。然しこれはなか〳〵容易な事ではありません、最善の思慮と明晰な智識とを備へた立派な母……賢母でなければ望まれません。然らば

立派な母　賢い母

とはどんな母でありませう、『母の道』は此の解釋を與へるために著はされたものであります。

小兒の教育を乳母と學校の先生とに委ねて顧みぬ母親は己が責任を無視したものであります。小兒の發育を自然の成行に任せて頓着せぬ母親は決して賢母とは申されません。己が正しき見識に基いて、小兒の一言一行にも深き注意を拂ひ、斷えず改善に力を盡す母親こそは、まことに立派な母……賢い母と申すことができませう。

『吾等の母を教育せよ』

皆様の御耳にも此の叫び聲が響きはいたしませぬか。

おかアさまの讀本にはカナがついてらア

元版　東京振替貯金口座　郵便區染井第三百五十五番　山邸內　內外出版協會

『家庭の新風味』著者　堺利彦編輯

家庭夜話

（全三冊洋裝合本＊第四版＊定價金壹圓＊郵稅十二錢）

▲子孫繁昌の話　堺利彦譯述、原作は佛國最近の小說大家ゾラの理想を發揮したるフルートフルネス　定價參拾錢　郵稅四錢

▲質素儉約の話　加藤眠柳譯述、原作は英國の有名なる文人ゴールドスミスの第一の傑作たるヴィカ、オブ、エーキフィルド　定價參拾錢　郵稅四錢

▲仁慈博愛の話　志津野又郎譯述、原作は米國ストー夫人が無限の同情を注ぎたる奴隷談、アンクル、トムス、ケビン　定價參拾錢　郵稅四錢

（時事新報）眞に趣味あり敎訓ある善き話にして家庭の讀物に適せり著者が此種の書を選びて荒び果てたる我家庭に一道の陽光を與へんとする用意多とするに足る、敢て原書の字句を拾はず平易通俗の物語にして兒童にも讀み得る樣に書きなしたる其苦心察するに餘りあり（讀賣新聞）著者は眞に家庭の新風味六冊を著新社會に於ける新家庭の模範を示せしが今またこの『家庭夜話』を出して善き家庭に善き讀物を供したり著者の筆は最も此の種の譯文に妙なるを（報知新聞）一日の勤勞を了て一家團欒の座にこの清健にして趣味ある讀物の行はれんことは最も喜ぶべし

版元　東京振替貯金口座第三百五十五番　鴨染井傳中山邸内　郵便區口座第三百五十五番　内外出版協會

羽仁吉一同もと子執筆

家庭之友

毎月一回　三日發行

▲石黑忠悳男曰く

この通り諸方から新聞や雜誌が參りますが、我輩者流の、よくいへば實地的、わるくいへたらシミッタレの者には、貴方の家庭之友が一番適切で、老妻もよみ、次には家に預つてある嫁にも讀ませ、又女中にも讀ませます……どれもこれも似寄つた口繪や濕つぽい小說や、位高き奧樣や御孃樣の御歌の石版摺などでは困ります、ドーゾ家庭之友はいつまでも是迄の特色を續けていたゞきたいものであります。

明治三十六年四月三日創刊

定價　一冊六錢（郵稅共）　十二冊　前金六拾錢（郵稅共）

版元　東京振替貯金口座第三百五十五番　鴨染井傳中山邸内　込山邸内　上井第三百五十五番　内外出版協會

百島冷泉譯編

通俗文庫

第一編 天路歷程

世界中で最も廣く讀まれ最も感化を及ぼしたる書

第二編 奴隷トム

ストウ夫人の名著で四百萬の奴隷を自由とした書

第三編 聖書物語

子供衆にもわかるやう聖書を簡易に說明したる書

第四編 赤靴物語

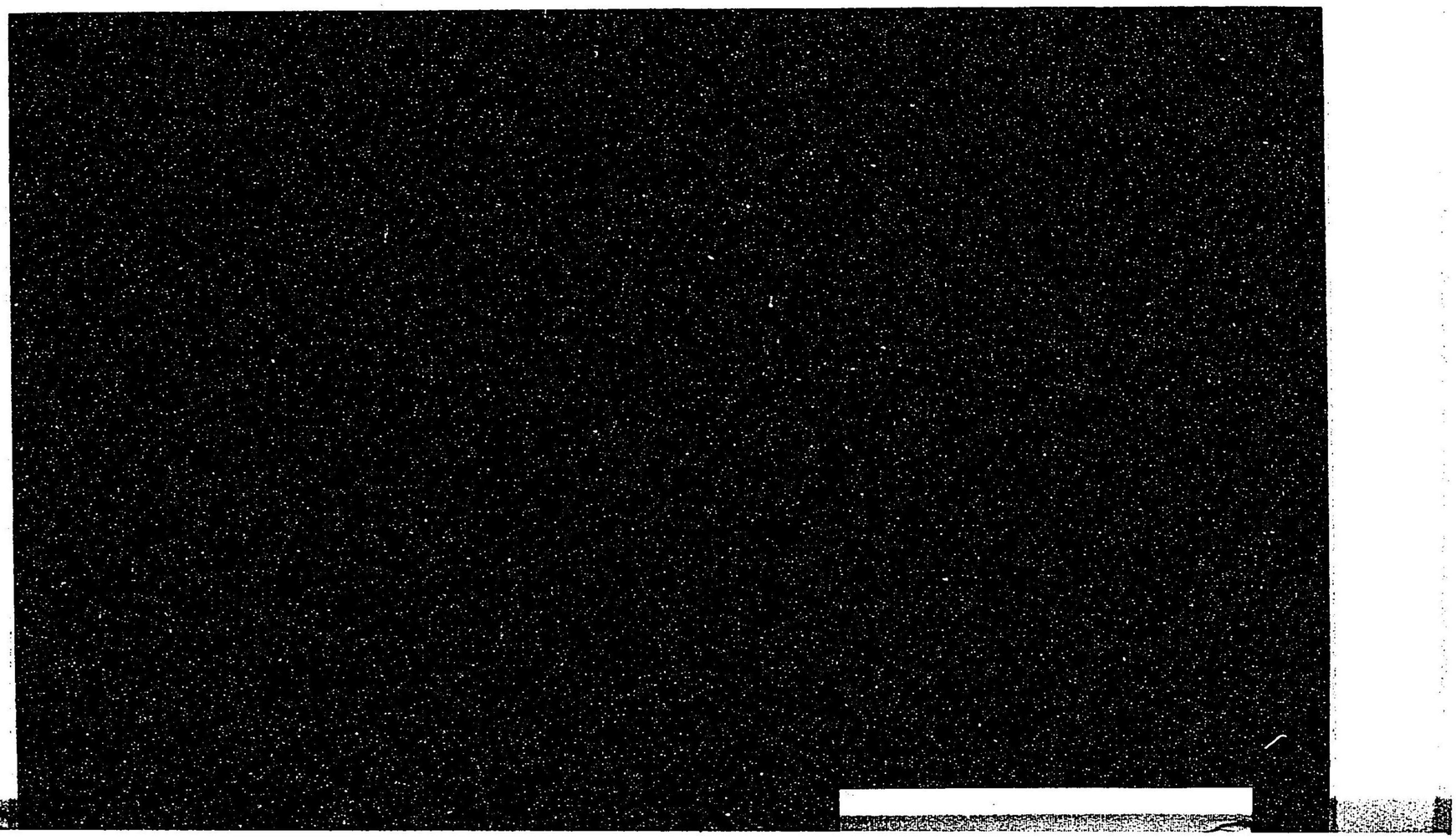
アンデルゼンのお伽噺中赤靴物語其の他傑作六篇

此通俗文庫は世界で有名な善い書物を選んで、極めて平易に、極めて面白く記述したものであります。ロビンソン漂流記、ガリバー旅行記イソップ物語など、續々發行します

各冊 定價 金貳拾錢 郵稅 金貳錢宛

元版 東京巢鴨郵便局區染井山縣邸內 振替貯金口座第三百五十五番 內外出版協會

258
440



特13
769

二人巡礼

国立国会図書館

101270-000-9

特13-769

二人巡礼

トルストイ/著

M41

DBY-0599